金時計

泉鏡花

青空文庫

上

広告

一　拙者昨夕散歩の際此辺一町以内の草の中に金時計一個遺失致し候間御拾取の上御届け下され候御方へは御礼として金百円呈上　可仕候

月　日　あーさー、へいげん

これ相州西鎌倉長谷村の片辺に壮麗なる西洋館の門前に、今朝より建てる広告標なり。時は三伏盛夏の候、聚り読む者堵のごとし。

へいげんというは東京……学校の御雇講師にて、富豪をもって聞ゆる——西洋人なるが、毎年この別荘に暑を避くるを常とせり。

館内には横浜風を粧う日本の美婦人あり。蓋し神州の臣民にして情を醜虜に鬻ぐもの、俗に洋妾と称うるはこれなり。道を行くに愧る色無く、人に遭えば、傲然として意気頗る昂る。昨夕へいげんと両々手を携えて門前を逍遥し、家に帰りて後、始めて秘蔵せし瑞西製の金時計を遺失せしを識りぬ。警察に訴えて捜索を請わんか、可はすなわち可なり。しかれども懸賞して細民を賑わすにしかずと、一片の慈悲心に因りて事ここに及べるなり、と飯炊に雇われたる束髪の老婦人、人に向いて喋々その顛末を説けり。

渠は曰く、「だから西洋人は難有いよ。」

懸賞金百円の沙汰即日四方に喧伝して、土地の男女老若を問わず、我先にこの財を獲んと競い起ち、手に手に鎌を取りて、へいげん門外の雑草を刈り始めぬ。

まことや金一百円、一銭銅貨一万枚は、これ等の細民が三四年間粒々辛苦の所得なるを、万一咄嗟にこの大金を獲ば、蓋し異数の僥倖にして、坐して半生を暮し得べし。誰か手を懐にして傍観せんや。

翌日はとみに十人を加え、その翌日、またその翌日、次第に人を増して、遂に百をもって数うるに到れり。渠等が炎熱を冒して、流汗面に被り、気息奄々として労役せる頃、高楼の窓半ば開きて、へいげん帷を掲げて白皙の面を露し、微笑を含みて見物せり。

かくて日を重ねて、一町四方の雑草は悉く刈り尽し、赤土露出すれども、金時計は影もあらず。

草刈等はなお倦まず、怠らず、撓まず、ここかしこと索れども、金属は釘の折、ブリキの片もあらざりき。

一家を挙げ、親族を尽し、腰弁当を提げて、早朝より晩夜まで、幾日間炎天に脳汁を煮られて、徒汗を掻きたる輩は、血眼になりぬ。失望してほとんど狂せんとせり。

されど毫も疑わざりき。渠等はへいげん君の富かつ貴きを信ずればなり。

渠等が労役の最後の日、天油然と驟雨を下して、万石の汗血を洗い去りぬ。蒸し暑き雑草地

を払いて雨ようやく晴れたり。土は一種の掬すべき香を吐きて、緑葉の雫滴々、海風日没を吹きて涼気秋のごとし。

へいげんこの夕また愛妾を携えて門前に出でぬ。出でて快げに新開地を歩み行けば、松の木蔭に雨宿りして、唯濡れに濡れたる一個の貧翁あり。

多くの草刈夥間は驟雨に狼狽して、蟻のごとく走り去りしに、渠一人老体の疲労劇しく、足蹌踉いて避け得ざりしなり。竜動の月と日本のあだ花と、相並びて我面前に来れるを見て、老夫は慌しく跪き、

「御時計は、はあ、どこにもござりましねえ。」

幾多の艱難の無功に属したるを追想して、老夫は漫に涙ぐみぬ。

美人は流眄にかけて、

「ほんとに御苦労だったねえ。」と冷かに笑う。

へいげんは哄然大笑して、

「日本人の馬鹿！」

と謂い棄てつ、おもむろに歩を移して浜辺に到れば、一碧千里烟帆山に映じて縹渺画のごとし。

へいげん美人の肩を拍ちて、

「人間は馬鹿な国だが、景色の好いのは不思議さ。」

と英語をもって囁きたり。

洋妾はへいげんの腕に縋りつつ、

「旦那もう帰ろうじゃございませんか。薄暗くなりましたから。」

「うむ、そろそろ帰ろうか。あの門外の鬱陶しい草には弱ったが、今ではさっぱりして好い心持だ。」

「ですけれども、あの人足輩はどんな気持でしょうね。」

「やっぱり時計が見着からないのだと想って、落胆しているだろうさ。」

「貴下はほんとに智慧者でいらっしゃるよ。百人足らずの人足を、無銭で役ってさ。」

「腰弁当でやって来るには感心したよ。」

「ほんとにねえ。あのまあ蛇のいそうな草原を綺麗に※らして、高見で見物なんざ太閤様も跣足ですよ。」

「そうかの。いや、そうあろう。実は自分ながら感心した。」

と揚々として頤髯掻い撫ずれば、美人はひたすら媚を献じ、

「ねえ貴下、私はなんの因果で弱小な土地に生れたんでしょう。もうもうほんとに愛想が尽きたんですよ。」

へいげんは頷きて、

「そうありたい事だ。こういっちゃ卿の前だが、実に日本人は馬鹿さな。しかしあんまり不便

だ。せめて一件の金時計を蔭ながら拝ましてやろうか。」

と衣兜を探りて、金光燦爛たる時計を出だし、恭しく隻手に捧げて遥に新開地に向い、陋み嘲けるごとき音調にて、

「そらこれだ、これだ。」

途端に絶叫の声あり、

「あれえ！」

と見れば美人は仰様に転び、緑髪は砂に塗れて白き踵は天に朝せり。

太く喫驚せるへいげんは更に驚きぬ、手中の金時計はすでに亡し。

中

「おい大助。」

卒然従者を顧みて立住まれる少年は、へいげん等を去ること数十歩ばかり後の方にありて、浪打際を散歩せるなり。父は小坪に柴門を閉じ、城市の喧塵を避けて、多日浩然の気を養う何某とかやいえる子爵なり。その児三郎年紀十七、才名同族を圧して、後来多望の麟麟児なり。

随う壮佼は南海の健児栗山大助。

「若様何でございます。」

「我が謂った通り、金時計は虚言だ。」
その声すでに怒を帯びたり。
「どうしてお解りになりました。」
「今二人で饒舌ってたろう。」
「私には解りませんが、しきりに饒舌っておりましたな。」
「うむ、解るまいと思って人の聞くのも憚からず、英語ですっかり白状した。つまり百円を餌にして皆を釣ったのだ。遺失たものだ、時計は現在持っている。汝も我の謂うことを肯かんで草刈をやろうものなら、やっぱり日本人の馬鹿になるのだ。」
血気勃々たる大助は、かくと聞くより扼腕して突立つ時、擦違う者あり、横合よりはたと少年に抵触る。※呀という間に遁げて一間ばかり隔りぬ。
「掏摸だ！」
三郎が声と共に大助は身を躍らして、むずと曲者の頸髪執って曳倒し、微塵になれと頭上を乱打す。
「手暴くするな。」
と少年は大助を制して、更に極めて温和なる調子にて、
「おい盗ったろう。」
掏摸は陳じ得ず、低頭して罪を謝し、抜取りたる懐中物を恐る恐る捧げて蹲まりつ、

「どうぞお見逃しを願います。」
　少年は打笑いつつ、
「何、突出しやせん。汝はなかなか熟練たものだ。」
「飛んだことをおっしゃいます。」
「いやその手腕を見込んで、ちっと依頼があるのだ。」
　大助は愕然として若様の面を瞻りぬ。
「この懐中物もやろう。もっと欲くばもっと遣ろう。依嘱というのは、そらあすこへ行く、あの、な、」
　とへいげんを指して、
「彼奴の持っている時計を掏ってくれんか。」
　その意を得ざる掏摸は、ただへいへいと応うるのみ。
　大助は驚きて、
「ええ、若様滅相な。」
「いや少し了簡があるのだ。」
　拘摸は事も無げに頷きて、
「じゃあの金時計ですね。」
「汝知ってるのか。」

「そりゃちゃんと睨んであります。あんな品は盗っても、売るのに六ケしいから見逃がして置くものの、盗ろうと思やお茶の子でさあ。」

「いや太々しい野郎だなあ。」

と大助は呆然たり。

「汝も聞いたろう、あの長谷の草刈騒動を。」

「知ってる段ですか。」

三郎は告ぐるに実をもってすれば、

「へえあの毛唐が！」

と掏摸だになお憤慨の色を表わせり。

「若様此奴は離すと、直に逃げてしまいますよ。」

「こう、情無いことを謂いなさんな。私やこんなものでもね、日本が大の贔屓さ。何の赤髭、糞でも喰えだ。ええその金時計は直に強奪って持って来やす。」

かかりし後、へいげんはその簪の花を汚され、あまつさえ掌中の珠を奪われたるなり。

下

三郎は掏摸の奪いたりし金時計を懐にしつ、健児大助を従えて、その夕月下にへいげんの門

を敲きぬ。

誰何せる門衛に、我は小坪の某なり、約束の時計を得たれば、あえて主公に呈らせんと来意を告げ、応接室に入るに際して、執事は大助を見て三郎に向い、

「時計を御拾得の方は貴下ですな。この方は何用でいらっしゃいました。」

三郎いまだ答えざるに、大助は破鐘声を揚げて、

「俺あ下男だ。若様の随伴をして来たのだ。」

「そんなら供待でお控えなさい。」

と叱するごとく窘めたり。大助は団栗眼を※きて、

「汝達の指図は承けねえ。さあ若様御一所に入りましょう。」

執事はこれを遮りて、

「いいえなりません。応接室へは、用事のある客の外は、一切他人を入れませんのが、当家の家風でございます。」

へいげんは金時計を失いて、たちまち散策の興覚め、すごすご家に帰りて、燈下に愛妾と額を鳩めつつ、その失策を悔い且つ悲しみ、怏々として楽まざりし。しかるに突然珍客ありて、告ぐるに金時計を還さん事をもってせり。へいげんは快然愁眉を開きしが、省みれば衷に疚しきところ無きにあらず。もし彼にして懸賞金百円を請求せんか。我にあらかじめ約あれば駟も及ばず、今はたこれをいかんせむ。

身を一室に潜めて、まずその来客を窺えば、料らざりき紅顔の可憐児、二十歳に満たざる美少ならんとは。這奴、小冠者何程の事あらん。さはあれ従者に勇士の相あり。手足皆鉄、腕力想うべしと、へいげん漫に舌を捲き、すなわち執事をして大助を遠ざけしめむとしたるなり。

大助は敵の我を忌むを識りて、小主公の安否心許なく、なお推返して言わんとするを、三郎は遮りて、

「宜しい彼室で待ってな。」

「だって若様。」

「可いよ。」

と眼もて語れば、大助は強うるを得ず、

「ええ、どこで待つのだ。案内しろ。」

「静にせんか、何という物言いだ。」

と三郎は警めぬ。

執事は大助を彼方の一室へ案内し、はたと閉ざして立去りける跡に、大助は多時無事に苦みつ、どうどうとしこを踏みて四壁を動かし、獅子のごとき力声を発して、満腔の鋭気を洩しながら、なお徒然に堪えざりけり。

応接室にては三郎へいげんと卓子を隔てて相対し、談判今や正に闌なり。洋妾も傍に侍したり。渠は得々としてへいげんの英語を通弁す。

この時三郎を軽んずるごとく、

「一体貴下は何御用でお出でなすったのです。拾った物なら素直に返して、さっさとお帰りなすったら可いじゃございませんか。」

「お黙んなさい。時計と交換にお礼の百円を戴きに来ました。」

「品物を拾って、それを返すのに礼金を与れと、そちらからおっしゃる法はございますまい。」

「いえ、普通拾って徳義上御返し申すのなら、下さるたって戴きません。しかし今度のは——こう謂っちゃ悪しい様ですが——礼金が欲しさに働きましたので、表面はともかく、謂わば貴下に雇われたも同でございます。それに承れば、何か貧乏人を賑わすという様な、難有い思召から出た事だと申しますが。」

と弁舌流るるごとく、滔々として論じ来るに、へいげん等はこは案外とおもえる様にて、

「それじゃ御持参の時計を拝見いたしましょう。」

「これです。」と懐より時計を出だして指示せば、

「どれどれ。」と取らんとするをさはさせず、三郎は莞爾として、

「違えば他に遺失人を探します。貴下のなら百円下さいまし。」

彼方もさる者詭弁を構えて、

「あれとは違いますが、やっぱり私の時計で、それは先刻掏摸に盗られた品だが。怪しからん、どこでお拾いなすった。」と暴らかに詰れば、三郎少しも騒がず、

「そんなら掏摸が遺失たのでしょう。何しろ私は御門外の一町以内で拾って来ました。」

へいげんは大喝して、

「小僧、汝は掏摸だ。」

「そういう者が騙拐だ。」

「何を。」と眼を瞋して、はたと卓子を打てば、三郎は自若として、

「ちと仔細があって、貴下が人は知るまいと思っている事を、私はよく知っております。文明国の御方にも似合わない、名誉ということを御存じがありませんか。私はむしろ貴下の御為を思って訐らうのですが、どうでございます。」

と朱唇大に気焔を吐けば、秘密のすでに露れたるに心着きて、一身の信用地に委せむことを恐るれども、守銭奴は意を決するあたわず。辞窮して、

「蒸暑い晩だ。」

とへいげんは窓に立寄りて海を望み、たちまち愕然として退りぬ。

「へいげん殺せッ。」

と叫ぶものあり。続いて起る吶喊の声。

月は中天にありて一条の金蛇波上に馳する処、ただ見る十数艘の漁船あり。篝を焚き、舷を鳴して、眼下近く漕ぎ寄せたり。こはこの風説早くも聞えて、赤髯奴の譎計に憤激せる草刈夥間が、三郎の吉左右を待つ間、示威運動を行うなり。大助これを見て地蹈※を踏みて狂喜し、

欄干に片足懸けて半身を乗出だしつ。

「も一番やれ！」

と大音声に呼ばわれば、舟なる壮佼声を揃えて、

「へいげん殺せ。」と絶叫す。

洋妾は耳を蔽いて卓子に俯し、へいげんは椅子に凭りて戦きぬ。

三郎は欣然として、

「日本人の馬鹿が、誑された口惜さに貴方を殺すという騒動です。はッはッ馬鹿な奴等だ。」

へいげんは色を失して、

「私、私、何を欺きました。」

「浜で御自分がおっしゃった言をお忘れですか。」

へいげんはあるいは呆れ、あるいは愕き、瞬もせで三郎の顔を瞻りたりしが、やや有りて首を低れて、

「決して欺きません、証拠がございまする。」

顔色土のごとく恐怖せる洋妾を励まして、直ちに齎らしめたる金貨百円を、三郎の前に差出せば、三郎は員を検してこれを納め、時計を返附して応接室を立出で、待構えたる従者を呼べば、声に応じて大助猛然と顕れたり。

三郎は笑ましげに、

「これをみんなに分けてやれ。」

大助は金貨を捧げて、高く示威運動艦隊に示しつつ、

「衆見ろ、髭から取ったこの百円を、若様が大勢に分けてやるとおっしゃる。」

その声いまだ訖らざるに、どっと興る歓呼の声は天に轟き、狂喜の舞は浪を揚げて、船も覆らむずばかりなりし。

明治二十六年（一八九三）六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成1」ちくま文庫、筑摩書房
　1996（平成8）年8月22日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第一巻」岩波書店
　1942（昭和17）年7月30日第1刷発行
初出：「侠黒兒」少年文學、博文館
　1893（明治26）年6月28日
※初出は尾崎紅葉「侠黒兒」の附録です。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：清角克由
2014年8月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金時計

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/